

研究ノート

水俣市茂道における地域変容と住民の生活史

茂道地域の歴史的形成過程から水俣病発生まで

熊本学園大学大学院
社会福祉学研究科博士後期課程 永野 いつ香

要旨

本論文では、地域変容と住民の生活史について明らかにすることを目的とする。対象地区として、水俣病多発地域の一つである茂道に焦点をあてた。研究方法は、50～90歳代の茂道住民20名に対する聞き取り調査である。各個人の生活史から、地域コミュニティの歴史などを記録した。

先行研究の検討と聞き取り調査の分析を重ねた結果、茂道の歴史的形成過程から水俣病発生初期の地域変容として、「明治以降の漁村形成」「戦中・戦後の新たな移住者」「海の汚染による魚場の破壊」などが見出された。

キーワード：茂道、聞き取り調査、歴史、水俣病事件、地域変容

Summary

After reviewing the preceding studies and analyzing the interviews from the residents, I found the regional transformation in early time of Minamata disease outbreak from the historical formation process (of village) in Modo. In other words, 'the creation of fishing village after the Meiji Era,' 'new immigrants during and after the war,' and 'the damage of fishing grounds caused by sea pollution.'

Keywords : Modo, interview, history, the incident of Minamata disease, regional transformation

目次

はじめに	第2章 戦中・戦後における地域変容
研究の目的と方法	第1節 第二次世界大戦期における茂道住民の生活
1. 研究の目的	第2節 新たな移住者の生活
2. 茂道における水俣病事件の概要	第3章 自然界にあらわれた異変
3. データ収集方法	第1節 海や生き物にあらわれた異変
4. 対象者	第2節 人間にあらわれた異変
本論	第3節 異変に対する茂道住民の認識
第1章 茂道の歴史的形成過程	結論
第1節 江戸初期から明治初期における地域形成の経過	参考文献
第2節 茂道における漁業のはじまり	

はじめに

本論文では、漁村の生活史に着目し、対象地区として水俣市茂道を選定した。これまで茂道は、水俣病患者多発地域として取り上げられることが多かった。しかし、水俣病発生以前の茂道の地域研究は見当たらない。水俣病事件による地域変容を探る前提として、茂道が持つ歴史や特徴を明確にしておく必要がある。鶴見和子が「多発部落の構造変化と人間群像」で示したように、茂道は、湯堂、月ノ浦、出月（水俣病多発地域）と比較すると「定住者」が多い¹⁾。そのため、歴史に通じている古老への聞き取りが可能な場所である。また、水俣市漁業協同組合の組合員が多い地域であり、栗原彬のいう「チッソの社員と市の有力者たちを中心とする市民社会からも、伝統的な共同社会からも周縁、下層と見なされてきた漁師」²⁾の生活を検証することも可能である。ここでは、既存の文献資料と対象者の語りを手がかりに第1章では、茂道の歴史的形成過程を探り、第2章では、戦中・戦後における地域変容、第3章では、自然界にあらわれた異変について記述した。この研究が、水俣病事件の歴史解明の一助となりうることを意図している。

研究の目的と方法

1. 研究の目的

水俣病発生までの、茂道における歴史的形成過程および地域変容を明らかにする。

1) 色川大吉『水俣の啓示 不知火海総合調査報告』上巻、筑摩書房、1983年、pp.157～245

2) 栗原彬編『証言 水俣病』岩波新書、2000年、p9

2. 茂道における水俣病事件の概要

ここでは、茂道の概要を記す。茂道に人が住み始めたのは、明治以降であると考えられる。昭和初期には4つの網元があり、いわし地曳網やボラ漁、一本釣りなど小規模な漁業を営んでいた。1つの網元に約20人の網子が集い、漁の水揚げを配当する出来高払いの就労形態であった。海での安全操業を祈念して、岬にはエビスさんが祭られている。境内坪数20坪の大山神社³⁾は、氏神として祀られており山の神と考えられていた。旧暦の9月16日になると山の神祭りで賑わう。茂道の子どもたちは、1872（明治5）年に創立された袋小学校、1947（昭和22）年開校の袋中学校に通った。

第二次世界大戦後、漁業民主化により、旧来の漁業団体や漁業権が再編成されることになった。GHQの指示により、1949（昭和24）年、水俣市漁業協同組合（以下、水俣市漁協と記す）が設立され、1951（昭和26）年に漁業権を得た。水俣市漁協は、茂道、湯堂、月ノ浦、梅戸、丸島、八幡地区、湯の尻地区からなる。組合の事務所は、熊本県水俣市丸島町に置かれた。これにともない、茂道の漁師約80名が水俣市漁協に加入し、水俣市漁協は計300名ほどが所属する組織となった。茂道の漁師は、いわし地曳網を主とし、他に巾着網、流し網、打瀬網、磯刺網、いか籠、ぼら飼付、たこ壺、吾智網、一本釣⁴⁾などの漁法を使用した。「明神鼻－恋路島－茂道鼻を結んだ線を以て囲まれた沿岸海域は、漁民の操業の拠点として魚介藻類の繁殖、特にぼら、このしろ、片口いわし等の水揚げ量は莫大な額にのぼっていた」⁵⁾とあるように、茂道は豊かな魚場に恵まれた場所であった。

1950（昭和25）年頃、自然界の異変を認識した茂道の石本寅重は、「ねずみの急増による弊害」を水俣市役所に訴えたが、衛生課の職員に「猫やねずみは死んだ方が良か」と一蹴されてしまう⁶⁾。陳情は聞き入れられず、この時点で行政は対策を講じなかった。1952（昭和27）年頃より、茂道に生息する魚介類への異変を多くの住民が確認するようになる。そして1954（昭和29）年8月1日、熊本日日新聞により「猫、てんかんで全滅、水俣市茂道、ねずみの激増に悲鳴」と報じられた。水俣病が公式に確認された1956（昭和31）年、茂道には119世帯577名が居住しており、患者は1名であった。患者数の多かった「明神（5名）、月ノ浦（16

3) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史 民俗・人物編』水俣市、1995年、p401

「茂道の山の神は、天保年間（1830～1843）に茂道山の万人として水俣から着任した佐藤珍内という役人が、我が家の守り神として祀ったことに始まると言われている。茂道は佐藤珍内が住みついでから次第に民家も増えて、何時ごろかはっきりしないが、大山神社は茂道の村人たちの氏神として祀られるようになった。佐藤珍内は神社を造った時、樹齢百年を超す松の巨木が生えていた神聖な場所を選んだのであろう。この松は加藤清正が肥後藩主のころ植えさせたという話もある」

上米良利晴『熊本県神社誌』青潮社、1981年、p247

4) 水俣病研究会『水俣病事件資料集』上巻、葦書房、1996年、pp.1019～1020

5) 水俣病研究会『水俣病事件資料集』上巻、葦書房、1996年、p130

6) 「1950（昭和25）年くらいだったと思う。私は前に行政協力員をしていたので市役所に顔見知りの職員もあったので市の衛生課に行き、猫が死んでしまっ、家ねずみが増えて困るから、ねずみ殺しの薬を部落に配給して下さいと個人で陳情した。処が当時の衛生課長の田中氏曰く、『猫やねずみは人間に害を及ぼす、猫やねずみは死んだ方が良か、どうでんねずみ駆除をするならば各組の協力員が代表で来て申請すれば一斉駆除をしてやる』と、私は、いやしくも市の課長が何をくだらんことを言うのか、猫の事は聞いておらん、ねずみの駆除を陳情しているのにと、憤慨したが、じっと我慢して、ああそうですかと喧嘩にならん中にと引き揚げた」と記述している。

名)、出月(7名)、湯堂(11名)の4部落」は、患者多発地区として注目を浴びた⁷⁾。疫学的調査を行った公衆衛生学教室では、発生地域と住民の生活について「漁村部落で、生業は近海並びに港湾内での漁獲に従事するものが多い。生活水準は低く、住居をはじめとする生活環境は頗る不良、非衛生的であり、上水の便は悪く、食生活は主食に配給米及び一部自作の麦、甘藷をとり、副食は漁獲の魚貝類を多食するほかは、蔬菜果実の摂取は乏しい」⁸⁾と報告した。さらに「現地住民には漁家が多く、多量の魚貝を摂取している」ことをあげ、何らかの原因で港湾内魚貝類が汚染していることを示した。こうした状況は、茂道でも同様であった。しかし、この時点で注目されることはなかったようだ。患者の家を訪ね検診をしていた原田正純医師が「水俣市内の人が、茂道に足を踏み入れることは滅多になかった。あの頃、茂道へ行くには、袋駅を降りた後、細い山道を歩いていかななくてはならなかった」と語るように、茂道は陸の孤島とも表現できる地理的な条件に置かれており、当時の茂道の様子を知る人はほとんどいなかった。また、住民が「1959(昭和34)年、テレビは牛島商店に1個あっただけ」、「新聞を買うくらいなら、食べ物を買った」と話すように、情報から遮断された場所であった。魚の危険性を知らされなかった住民は、汚染された魚貝類を長期間にわたって食べ続けた。

1958(昭和33)年8月、生駒秀夫が発病したことで、茂道は注目された。その後、水俣病事件をめぐり、1960(昭和35)年8月16日漁協の水俣病関係補償交渉の過程で茂道の漁師が7名除名、1967(昭和42)年以降、海の汚染と漁業不振のなか実施された農業構造改善事業による甘夏植栽園造成、1969(昭和44)年6月14日第一次訴訟提訴、1971(昭和46)年10月11日より自主交渉闘争開始など、地域内の生活を変容させる出来事が次々と起こった。

1970(昭和45)年7月時点での茂道の認定患者は、渕上洋子、杉本トシ、杉本進、牛島直、生駒秀夫(梅戸に転居)の5人。胎児性水俣病患者は渕上一二枝、滝下昌文、中村千鶴、森本久枝の4人であった⁹⁾。その後、認定患者は増え続け、水俣病多発地区の一つとして知られることとなった。

1995(平成7)年の政府解決策の際、和解を承諾して、医療手帳や保健手帳を取得した患者や、申請したが非該当となった患者がいる。2004(平成16)年10月15日のチッソ水俣病関西訴訟最高裁判決以降、新保健手帳を取得した患者や、新たに裁判を提訴した原告患者、水俣病認定申請中の患者、差別を恐れて潜在している患者など、多様な患者が同一地区に暮らしている。このことは、同一地区に住み同じように魚介類を食べ暴露した患者が、行政の対策により分断されてきた歴史を示している。2007(平成19)年7月末日現在、茂道には185世帯470名が住んでおり、認定患者数は、200名を越えているとされている。水俣病認定患者分

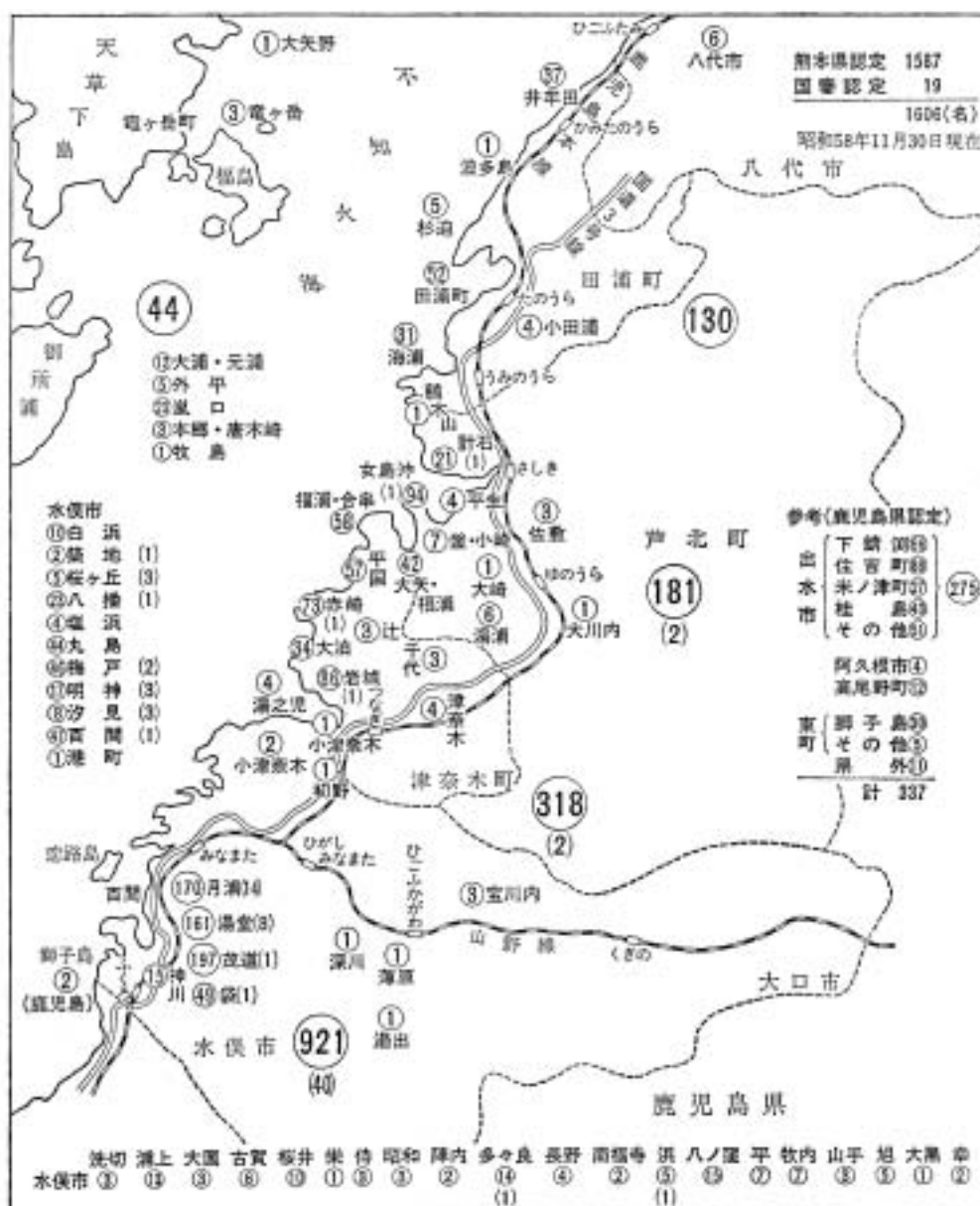
7) 有馬澄雄『水俣病－20年の研究と今日の課題』青林舎、p82

8) 喜田村正次他「水俣地方に発生した原因不明の中枢神経系疾患に関する疫学調査成績」『熊本医学会雑誌』第三一卷補冊第一、1957年1月、p2

9) 水俣病研究会『水俣病にたいする企業の責任－チッソの不法行為』復刻版、2007年、pp.296～299
水俣病認定患者総数は121人(内、胎児性水俣病患者23人、死亡者46人)である。

布図にあるように、茂道の患者数は他の地域と比べると高い割合にある。

図1 熊本県における水俣病認定患者分布図



(出典) 原田正純『水俣病にまなぶ旅』日本評論社、1985年、p98

3. データ収集方法

茂道住民に対する聞き取り調査を実施した。調査を開始した2004（平成16）年7月は、チッソ水俣病関西訴訟最高裁判決が出される前であった。そのため、一部には「政治決着で

水俣病は終わった。いまさら何も話したくない」という風潮があり、水俣病に関する直接的な質問が難しい状況にあった。そこで、「これまでのあなたの人生についてお話をお伺いできますか」と質問をして、個人の生活史から地域コミュニティの歴史や水俣病事件に関連する出来事を引きだしていく手法をとった。

対象者は、茂道地区に住む水俣病事件を経験している50～90歳代の20名である。生活史から水俣病事件に関する話題が出た際は、特に注意深く耳を傾けた。面談は、1人2～5回行い、1回につき1時間半～5時間の時間をかけた。対象者によって、話をする速度やまとまり具合に差があるため、1人にかけた時間にばらつきが生じた。なお、面談中は、対象者の語りを聞き続けることを基本とし、途中で話を妨げることはせず、指摘や評価といった類の行為を避けることを心掛けた。聞き取り内容は、対象者から承諾を得てICレコーダーに録音しトランスクリプトした。

4. 対象者

茂道地区には、2007(平成19)年7月末日現在、185世帯470名が住んでいる。湯堂、北袋、南袋、神川、西ノ浦団地、岡山組とともに第17行政区に属し、その内部は4組に分かれている。水俣市茂道地区在住の20名に聞き取り調査を行った。他に、電話対応のみの1名、自宅を訪問したが拒否された方が1名いる。全22名の内訳は男女別年齢順に、Aさん(男性・1909年生まれ)、Bさん(男性・1925年生まれ)、Cさん(男性・1932年生まれ)、Dさん(男性・1933年生まれ)、Eさん(男性・1934年生まれ)、Fさん(男性・1936年生まれ)、Gさん(男性・1937年生まれ)、Hさん(男性・1943年生まれ)、Iさん(男性・1949年生まれ)、Jさん(男性・1950年生まれ)、Kさん(男性・1954年生まれ)、Lさん(女性・1918年生まれ)、Mさん(女性・1921年生まれ)、Nさん(女性・1925年生まれ)、Oさん(女性・1926年生まれ)、Pさん(女性・1928年生まれ)、Qさん(女性・1929年生まれ)、Rさん(女性・1938年生まれ)、Sさん(女性・1947年生まれ)、Tさん(女性・1950年生まれ)、Uさん(女性・1954年生まれ)、Vさん(女性・1955年生まれ)である。そのうち、水俣病認定患者は男性3名・女性5名、棄却者は男性4名・女性1名、医療手帳保持者は男性1名・女性1名、申請棄却・政府解決策時の非該当者は男性1名・女性1名、未申請者は男性1名・女性3名、不明は男性1名となっている。茂道住民とは別に、戦時中に奉仕隊として茂道に連れてこられた女島在住のWさん(女性・1926年生まれ)からもお話を伺っている。

なお、本文では敬称を略して表記することとする。

第1章 茂道の歴史的形成過程

第1節 江戸初期から明治期における地域形成の経過

熊本県水俣市は、県の最南端に位置する。北は葦北郡芦北町、旧湯浦町、津奈木町、南は鹿児島県出水市、大口市、東は球磨郡に接しており、西はリアス式海岸となって不知火海に

面している。市の三方は、標高687メートルの矢筈山、969メートルの国見山、902メートルの大関山等に囲まれている。これらの山岳に源を発した河川が、水俣川となって西の平坦地に向って流れており、この平坦地に市街地が広がっている¹⁰⁾。水俣市からさらに約6キロ南方に、リアス式海岸の湾と陸とが近接した自然豊かな茂道がある。

第1節では、地名から茂道の歴史をさかのぼる。その際、茂道の大字にあたる袋村と、村を集約する水俣手永といった地名を手掛かりにした。1632（寛永9）年、加藤忠広改易後は細川氏領となる。1633（寛永10）年、細川氏は手永制¹¹⁾を実施し、手永には惣庄屋が置かれた。水俣手永の長である惣庄屋は、水俣城主を勤めた深水宗方の一族が世襲して陣内村におり、150石をあてがわれて代々水俣吉左衛門を名乗った¹²⁾。村々の表記は「肥後国葦北郡水俣手永袋村」で、袋村は、肥後国最南端部の八代海沿岸にあり、北に月ノ浦村・中茂村、東に野川村・茂川村、南の肥薩国境に神ノ川がある。この時点では、袋村の小字名に茂道という表記は見当たらない。

茂道に誰がどのようにして住み始めたかについては、歴史記録としては残っていない。以下に、手掛かりとなりそうな記録と証言を記しておく。『新水俣市史 民俗・人物編』には、

「茂道には恵まれた入江があったが、昔から茂道山の茂みに囲まれて、この入江辺りは人畜が通うところではなかった。1632（寛永9）年ごろから細川藩が、藩境防備を目的とした松の植林と管理に力を入れるようになってから人が通るようになり、天保年間に陣内の佐藤珍内という人が茂道山の番人として茂道に移住して来てから、次第に人家が増えたと言われている」¹³⁾

と記されている。『新水俣市史 民俗・人物編』は文書資料としては何もあげておらず、住民の記憶あるいは言い伝えによっていると思われる。たとえば、佐藤家の子孫というPは、

「江戸時代、藩から、『山の番ばせろ』っち召集のあったっじゃろう。茂道に一番に山の番で茂道山に来らしたのが佐藤家。珍太郎で3代目。その前が、佐藤鱒太郎じゃったったいな、そこまで分かる」¹⁴⁾

と語っている。同様に、佐藤珍内の直系の子孫であるKやDも、佐藤家の言い伝えとして「茂道に最初に住み始めたのは、佐藤珍内」という話を伝承している。また、他の茂道住民

10) 熊本県総務部地方課『熊本県市町村合併史』熊本県総務部地方課、1969年、p489

11) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史』上巻、水俣市、1991年、p266

手永制とは、細川氏独特の地方行政の制度で、手永とは手の届く範囲というような意味で、郡と村の間くらいの大きさが普通で、大体30ヵ村1万5,000石内外を一つの区画としている。

12) 下中邦彦『日本歴史地名大系第四四巻 熊本県の地名』平凡社、1985年、p778

13) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史 民俗・人物編』水俣市、1995年、p149

14) P：1928（昭和3）年生まれ。2006（平成18）年5月12日聞き取り。

も「茂道初の入植者は佐藤家」「大山神社は、もともとは佐藤家の氏神だった」と認識している。文書資料は見当たらないが、佐藤家と同様に他の茂道住民のおおかたが集団で記憶していることを根拠として、現時点では佐藤珍内が最初の茂道住人であると考えておく。

次に、文書記録として、1633（寛永10）年の『芦北郡人畜改帳』をみていく。「水俣内袋村」には田畠高552石5斗余、屋敷数37、男128、女89、牛7、馬19と記されている¹⁵⁾。

『熊本県の地名』によると、この表記は、野川村と茂川村を含む数で、袋村のみでは屋敷数24、男82、女59、牛4、馬11である¹⁶⁾。袋村では、牛や馬をつかい農業を主軸に生活を営んでいた様子がうかがえる。1屋敷あたり約6人弱で、1屋敷が1家族と見てよい規模であり、袋村における平均的な家族の人数と見てよいと思われる。1家族に男が約3.4人、女が約2.5人である。祖父母、両親、子供という家族を考えると、各世代に男女各1人ずつということになり、労働力は意外に少ないと言えきであろう。また牛馬についてみると、牛、馬両方を持つ家もあった可能性を考えれば、約半数の農家は牛馬を持たなかったことになる。総体的に見て17世紀なかばの袋村は零細農村と言ってよいと思われる。

1728（享保13）年に作成された、『肥後国誌 下巻』には「葦北郡水俣手永袋村」という表記がある。葦北郡を構成しているのは、田浦手永、佐敷手永、津奈木手永、久木野手永、湯浦手永、水俣手永の6手永である。この中の水俣手永に袋村が含まれていた¹⁷⁾。袋村については、

「高百八十九石七斗餘向袋ト云小村アリ薩州切通ヘノ道境迄二十一町餘」

と書かれている。189石を24軒で割ると1軒あたりの石高は8石となる。一軒あたりの持高は7.8であることから、農業を中心とした村であったと考えられる。また、袋村には薩摩藩切通の道境まで約2キロ（2,289メートル）あったことが記載されている。薩摩藩との国境に位置していたため、袋湊口上番所と袋村陸口下番所を設け警備に力を入れていた。村内を薩摩街道が通り、11枚立の高札場もあった。

袋村の特徴として『肥後国誌』は茂道山を取りあげ、

「異邦ノ書ニ藻銅山ト云ヘリ緑樹繁茂シテ壩ニ臨ミ大茂銅小茂銅蟠屈シテ袋江ヲ抱ク里俗此山ノ松ヲ材ニスレハ理正シク杉ノ如シト云」

15) 城後尚年ほか『農村史料叢書五 芦北郡人畜改帳三』農村史料刊行会、1971年、p85

なお、上記の資料は、東京大学史料編纂所編纂『大日本史料』が第一資料である。

16) 下中邦彦『日本歴史地名大系第四巻 熊本県の地名』平凡社、1985年、p784

17) 後藤是山『肥後国誌』下巻、九州日日新聞社印刷部、1917年、pp.376～434

葦北郡：田浦手永、佐敷手永、津奈木手永、久木野手永、湯浦手永、水俣手永の6手永。

水俣手永：陣内村、濱村、船津村、丸島村、小津奈木村、初野村、大迫村、長野村、深川村、實河内村、葛渡村、石坂村、袋村の13村。

という記述が残されている。「藻銅山」の松は材質が良く、肥後国誌では「理正シク杉ノ如シト云」と、伝聞として記しているが、木原邦雄は『日本林学会雑誌』において、「まるで杉のようだった」¹⁸⁾と表現しており、肥後国誌の伝聞記録を裏付けている。第二次世界大戦後まで建築材や造船材に重用されていたが、その後、松喰虫の被害によって枯死している¹⁹⁾。

明治維新後、政府は日本地誌に関する調査を各府県に命じ全国的規模で実施し、『全国村名小字調査書』が作られた²⁰⁾。この調査書に「肥後芦北袋村」の小字として、茂道、小茂道が登場する。1903（明治36）年、袋村民が書いた家計簿をもとに作られた『百年昔の家計簿』によると、魚を売りにきた人として、「茂道 オトセ・オモン・オタ・オマキ・オクマ・オサナ・オキサ・シキ・オミキ・オシカ・トモ・ツリ・オユキ・タチ・佐藤・佐藤善蔵の娘・弥蔵の母・オスモ」とある²¹⁾。ここに、「佐藤」という苗字を確認することができる。

以上の記録から、少なくとも江戸時代18世紀の前半には「大茂銅小茂銅」と呼ばれる地域があり、明治時代には「肥後芦北袋村茂道」という地名が存在していたことがわかる。

第2節 茂道における漁業のはじまり

第2節では、明治初期から昭和初期における茂道の漁業について取り上げる。『肥後国誌』に「緑樹繁茂シテ」とあるように、繁茂した茂道松が岬をおおい、それが魚の産卵場所や隠れ場となっていた²²⁾。茂道松のおかげで魚介類が豊富に生息するため、漁をするには最適な場所であった。また、背後に丘陵がせまるといふ地形や、水田に必要な水を確保できないなど地理的に農業を営むことが困難であった。そのため、茂道に移り住んだ佐藤家はサムライから漁師として生計を立てるようになった。明治時代以降は、金子家、浜付家など天草の龍ヶ岳、倉岳、御所浦から茂道に移り住んだ人々も漁に携わるようになり²³⁾、漁業を営む村が形成されていった。日本の漁村では漁業だけに依存する純漁村は例外的で、半農半漁の生活を営むものが多かったように、茂道も大規模な漁というよりは、半農半漁で生活を営む零細な漁民が多かった。

漁業の歴史について石本寅重は、

「地曳網は、天保年間に袋の有志家達12件が肥料にするための、いわしや雑魚を獲るため12張を曳いたのが始まりで、明治初期に湯堂に4張り、茂道に8張り袋から買い受け、

18) 木原邦雄「茂道松の亀紋に就て」『日本林学会雑誌』第17巻第1号、1935年、pp.21～32

アカマツとクロマツの混合種の茂道松は、後に造船材として賞美された。

19) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史』上巻、水俣市、1991年、p474

20) 内務省地理局編纂物刊行会『明治前期全国村名小字調査書』第6巻、ゆまに書房、1986年、pp.1～3

地名簿には、町村合併が進行する以前の江戸時代からの村名が殆ど残っており、さらに呼び方（ふり仮名）が記されている。地租改正により地名を廃す前の貴重な資料である。

「肥後芦北袋村」：大畑、フツ原、橘、乗尾、一ツ橋、鳥越、檜木迫、藤岩、西ノ浦、茂道、小茂道、川尻、村下、境村、村上、帽子、狩岡、静岡、花立、川端、笹谷、岡山、大原、矢筈が記されている。

21) 山田善二郎『百年昔の家計簿』2003年、p58

22) A：1909（明治42）年生まれ。2004（平成16）年9月30日、自宅にて聞き取り。

23) G：1937（昭和12）年生まれ。2008（平成20）年9月9日、水俣市漁業協同組合にて聞き取り。

地曳網代を今の場所につくり浜や岸から網を曳いた。茂道では杉本亀蔵、佐藤吉三郎、杉本寛三、中村藤三郎、淵崎善四郎、津川徳太郎、森大吉の8網元（金子徳松の実父田上恵蔵の語り伝えによる）あった。昭和初期地曳網を曳いていた人達は茂道では杉本寛三、杉本留蔵、杉本力松の三兄弟、佐藤藤次郎、佐藤浅次の兄弟、中村藤太郎、石山小登治、川元福次郎の8張。地曳網は次第に中取り網に変わり、昭和10年頃は、杉本寛三、杉本留蔵、中村荒蔵、森満義の4統になった」²⁴⁾

と記録している。江戸期の袋村では、いわしや雑魚を肥料にする目的で地曳網を曳いた。1749（寛延2）年4月、榎方役所を城内に設け、1752（宝暦2）年には、これを独立させて「榎方御間」とし、勘定所の集銀八百貫を引き渡して貨殖の独立機関としての機能を与えている²⁵⁾。こうしてはじまった藩政改革で、細川重賢は百姓に榎の栽培を勧めている。榎を藩が買い上げて販売するなど農業の商品化が進んだことで、金肥²⁶⁾の需要は高まりつつあった。この動きのなかで、袋村に金肥生産のための漁業が導入されたと考えられる。

明治初期、湯堂や茂道といった海岸沿いの集落で漁業が盛になると、袋の有志家達から網代²⁷⁾を買い受け、独自の地曳網代を作る者が出てきた。明治初期、茂道には8つの網元があった。この記録から、湯堂や茂道では明治初期より本格的な漁業が始まったことが分かる。この時期、湯堂や茂道で漁業に携わっていた2人の証言をみていく。1896（明治29）年、湯堂で生まれた坂本嘉吉は、

「網が四張居った。網代場が湯堂浦だけで、湯堂下、長辺（ながへた）、西ノ浦、湯（がた）て、四所あったっばい。そすと、緑鼻、ガテて今の汽船の着く所、明神の下な。もとは一等網代が多かったろうがな。緑鼻は千貫網代で、もう網たてさかすりゃ、鰯の回って来よった所たい」²⁸⁾

と語っている。網元が4つあり、網代は湯堂浦だけで4ヵ所あった。明神の下にある緑鼻は網代の中でも特にいわしのとれる場所であった。また、1909（明治42）年、茂道で生まれたA（杉本寛三の孫）は、

「自分の育った茂道には、子どもの頃は大体30～40軒くらい家があった。その中でいわし網を引く網元が8統ありました。湯堂が3統、茂道が8統の全部で11統ありました。

24) 石本寅重「茂道の漁業及び農業の由来記」、創立記念誌編集委員会『創立記念誌－袋小学校100周年・袋中学校25周年－』創立記念事業実行委員会、1973年、pp.187～188

25) 「新・熊本歴史」編集委員会『新・熊本歴史5 近世』下巻、熊本日日新聞社、1980年、pp.38～40

26) 金肥とは、魚肥や油かすなど「お金で買う」肥料で、栄養（窒素）を含んでいたため重宝された。

27) 魚群が集まってくる場所に、漁の網をかける漁場のことを網代という。

28) 岡本達明『近代民衆の記録 7－漁民』新人物往来社、1978年、p.250

坂本嘉吉は、「茂道は網は幾張も居ったけども網代が少なかもンじゃって茂道川の所は切込まれたわけたい。長辺（ながへた）と西ノ浦は廻り番たてる如てなったじゃった」と茂道の漁の様子を証言している。

網を引く網代が、川尻、茂道浦、小茂道、白戸、ボウズガハンド（坊主ガ半島）、瀬ノ内、ナガヘタ、西ノ浦、湯堂ン下、ミドリ、ガッチの11ヵ所あった。11艘でグルグル一日中場所を交代して回って。昔は、今のように沖で魚をとることは少なく、地曳網といって岸まで行かないと魚を揚げることはできなかった。一網あげるのに最低10人くらいは必要だった」²⁹⁾

と語っている。Aの記憶によると、1920年代の話だという。茂道には30～40軒の家があり、網元は8つ、網代は11ヵ所あった³⁰⁾。網代に関しては、1922（大正11）年に熊本県葦北郡水産会が著した『熊本県葦北郡水産基本調査』がある。これによると、水俣町の鰯地曳漁業網代名は、「川尻浦、二子島、中森、西明神、マテガタ、クワチ、勝崎鼻大吉、上御込、大戸地先、小屋ノ下、小路島東端、緑ク、湯杓土浦、ナガヘタ、瀬ノ内浦、ボスガン下浦、天神、田尻、榊斗、折口、古手」³¹⁾があり、坂本嘉吉やAが示した網代と一致する網代がある。彼らの示した「潟、茂道浦、小茂道、白戸、西ノ浦、湯堂ン下」などは見当たらないが、湯堂や茂道の漁民にとって身近な網代として知られている。

漁法について石本寅重は、

「地曳網漁は網舟が一そりで片手まわしと云って片方を浜や岸にしかけておいて、いわし等の魚群を、網を積んだ網船で網を投げ入れてたてまわして浜（網代）から網を沢山の人で曳き揚げて漁をする。中取り網は二そりの網船で魚群をかこみ船の上で（地曳網代）でロクロ巻き（かぐらさん巻き）をして網を巻き揚げて漁をする」³²⁾

と説明している。茂道では、網元が天候や潮時を確認し、いわしの群れを見つけると、ほら貝を吹き網子に知らせ呼び寄せていた。普段、農作業や一本釣りなどを行っている網子は、ほら貝の合図で港に集まっていたという。

水俣の網元と網子は、協力して漁をするため家族同然の付き合いをしていた。水俣の漁業は大資本によるものではなく零細漁民という立場だったが、網元の方が裕福であったため網子に援助することもあった³³⁾。茂道でも例外ではなく、1925（大正14）年に生まれたNは、

「隣近所は家族のようでした。家族や親戚が中心となって漁をするということもあって、余計にお互いに気遣って、持っている人が持たないものにおもやうという関係性が

29) A：1909（明治42）年生まれ。2004（平成16）年9月30日、自宅にて聞き取り。

30) 当時の茂道村の範囲が現在の行政地区範囲と同じではないため、戸数に関しては、Aが住んでいた周辺の戸数を指している可能性がある。Aは故人のため現在は確認することができない。

31) 熊本県葦北郡水産会編『熊本県葦北郡水産基本調査』1922年（推定）、p22

32) 石本寅重「茂道の漁業及び農業の由来記」、創立記念誌編集委員会『創立記念誌－袋小学校100周年・袋中学校25周年－』創立記念事業実行委員会、1973年、p187

33) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史 民俗・人物編』水俣市、1995年、p153

ありました。特に、この辺（茂道）はものを持たない人が多かったですから、その分、みんなで助け合っていました」³⁴⁾

と、互助的な関係性が形成されていた様子を語っている。1954（昭和29）年の漁業センサスで、「資本金100万円をこえると、地縁、血縁性は漸次弱まる傾向を有しており、また、漁業種類別では、凡そ沿岸漁業、沖合漁業、遠洋漁業の順に地縁、血縁性が弱まる傾向がみられた」³⁵⁾と記すように、沿岸漁業が中心の茂道は、地縁、血縁性が強い地域であった。こうした地域であったため、網元と網子の間に主従関係はみられず、家族的近親性を含んだ緩やかな契約関係が結ばれていたと考えられる。

第2章 戦中・戦後における地域変容

第1節 第二次世界大戦期における茂道住民の生活

茂道にあった第21海軍航空廠袋補給工場（以下、袋補給工場と記す）は、1959（昭和34）年に大島竹治日本化学工業協会理事が報告した「爆薬説」の舞台として知られている³⁶⁾。第3節では、第二次世界大戦期における袋補給工場建設および茂道住民の生活と、戦後の新たな移住者に着目する。

第二次世界大戦がはじまると、志願して入隊するものや召集令状により、茂道から出兵するものが出てきた³⁷⁾。これとは反対に、1943（昭和18）年9月頃より朝鮮・沖縄・福岡・長崎・鹿児島・宮崎・熊本・荒尾・女島などから集められた奉仕隊の存在がある。奉仕隊は、袋補給工場の建設準備のために連れてこられた。

隧道掘削をはじめ、海軍関係の仕事に従事していたQは、茂道住民と奉仕隊の交流について、

「処女会がこの部落にはあったから、太か釜でおイモやイワシなんか湯がいてな、メゴで担いで持って行って食べさせよった。奉仕隊は、今の市川病院の下の畑の平地にある長屋に住んだ。炊事場も太かつがでけとった。茂道んもんで施設部（袋補給工場を指す）で働いておるもんところには、1件に2～3人住み込みでおらしたなあ」³⁸⁾

34) N：1925（大正14）年生まれ。2004（平成16）年9月30日、自宅にて聞き取り。

35) 農林省統計調査部『第二次漁業センサス（海面漁業第二報）』農林統計協会、1956年

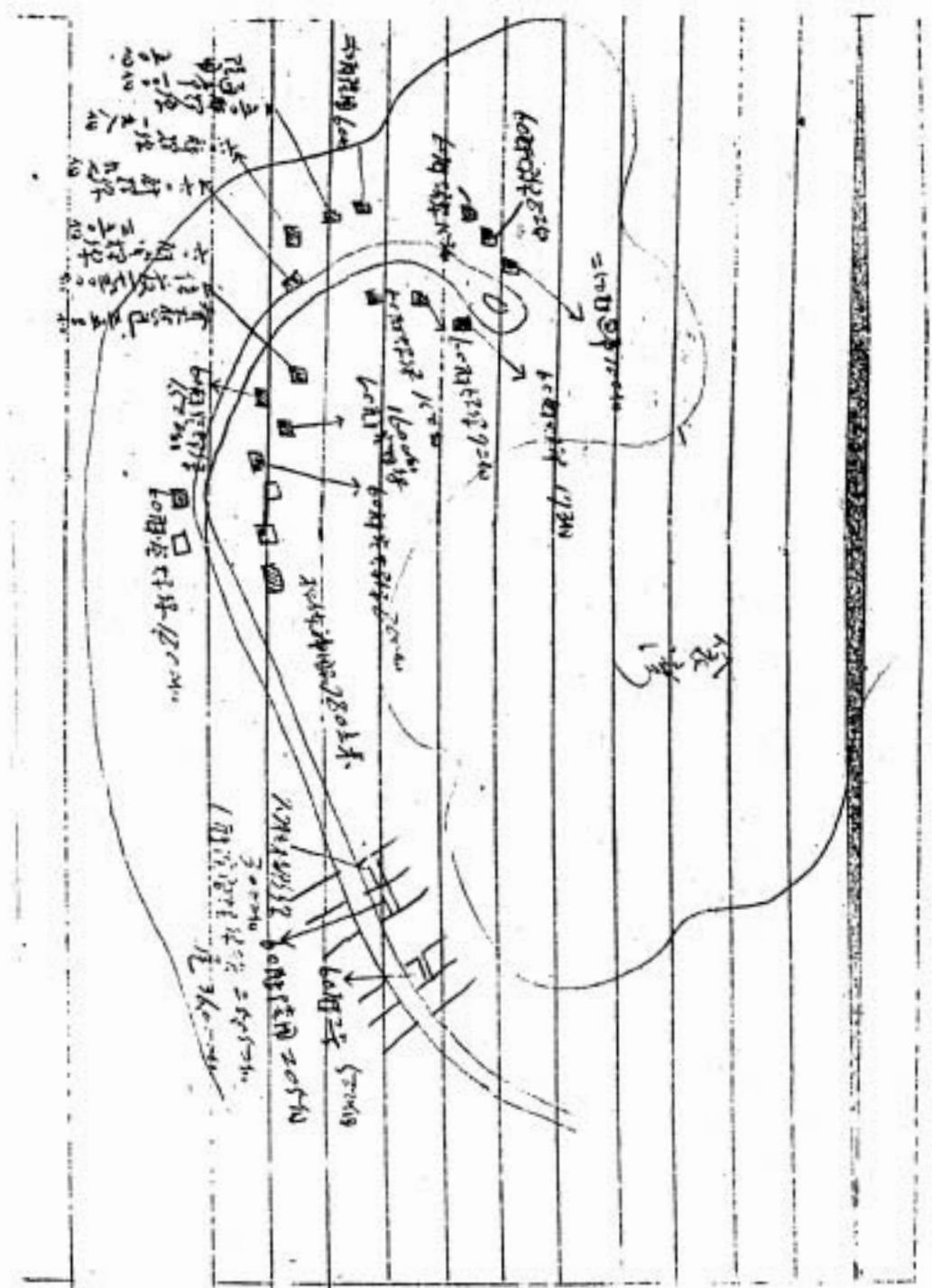
36) 水俣病研究会『水俣病事件資料集』上巻、葦書房、1996年、pp.938～943

37) B：1925（大正14）年生まれ。2006（平成18）年5月2日、自宅にて聞き取り。

私たちは、昭和17年まで福岡の海軍工廠におったんですよ。1年もおらんで、「ここになごおっても、駄目だから、もう志願していこい」ち、友達と2人で、志願して。もう一人んとは陸軍に、私は海軍やったんですよ。はいから、昭和18年の1月10日からは海軍に入隊。21年に茂道に帰ってきた。

38) Q：1929（昭和4）年生まれ。2007年8月9日、自宅にて聞き取り。

図2 第21海軍航空廠袋補給工場



(出典) 第21海軍航空廠袋補給工場海軍「第二十一海軍航空廠引渡目録1 / 2 第二復員局」防衛研究所図書館所蔵

と語っている。奉仕隊は、「長屋」もしくは、「袋補給工場で働く茂道住民の家」で生活したという。奉仕隊が茂道で働き始めた当初は食料の支給が不十分だったため、茂道の少女隊が自主的にイモやイワシを届けていた。また、奉仕隊として女島から連れてこられたWは、

1ヵ月おきに、田ノ浦、湯ノ浦、津奈木から何人ち順番に茂道に行きよった。茂道には、男が100～150人ち来とらしたけん。炊事はおなごが1班は12～13人、2班はどしこ、ちいう形で。朝は4時半やら5時に起きて朝ご飯を作って。朝ご飯が終わったら、食器の片付けと昼ご飯の準備という具合に。夜は、次の朝の仕込みと、一日中、その繰り返しでね。料理は、ダシゴ（イリコダシ）を入れて、下茹でして、イモ、大根、大葉、白菜やらを刻んで、おつけ（お味噌汁）のような豚汁のようなものを。贅沢なものではなかった。バラック家がいっぱい作ってあって。飯場は男の人の住むところの隅にあった。おつけやご飯を炊くのに、ガスは無いからな、ベラ（材木）で炊くの。その頃は、長靴の長かつぱ、踏んで、水でん井戸水で汲みよった。ガラガラやって。食器洗うのも大変。男は男、女は女で班長のおっと。私は、『佐々木さん、出水に米ば取りに行くよ！』ち言われて、しょうゆやら、樽に入った味噌やらも出水まで取りに。運転は男がしてな³⁹⁾

と当時の飯場での様子を語っている。袋補給工場は、佐世保鎮守府の第21海軍航空廠に所属していた⁴⁰⁾。工事が始まった当初は、材料や道具、食料など何もなかったため、3台のトラックを使い、佐世保鎮守府第22海軍航空廠所属の第22海軍航空廠鹿屋支廠出水補給工場まで取りに行っていたようだ⁴¹⁾。補給工場の倉庫場所を確保し、道路整備を行った後、袋補給工場や地下倉庫の建設に取りかかったという。終戦までの間に、バラック（飯場）が建設され、菅原神社のふもとに事務所を作り⁴²⁾、爆薬を保管するための倉庫が3つ置かれた。6つの隧道は、掘削している途中で終戦となったため未完成であった（図2、3、4）⁴³⁾。

戦時中、茂道漁民は地曳網と中取網の手法で漁を続けていた。海軍関係の仕事に従事しながら、網子としていわし漁を続けていたQは、

39) W：1926（大正15）年9月18日生まれ。2007（平成19）年8月8日、自宅にて聞き取り。

40) 佐世保鎮守府の第21海軍航空廠の配下には、第21海軍航空廠日宇補給工場、第21海軍航空廠大村補給工場、第21海軍航空廠博多補給工場、第21海軍航空廠上海補給工場、第21海軍航空廠崎邊補給工場、第21海軍航空廠廣畑補給工場、第21海軍航空廠袋補給工場、第21海軍航空廠沖縄補給工場、第21海軍航空廠青島補給工場と、全部で9つの補給工場がある。

41) Q：1929（昭和4）年生まれ。隋道堀りなど、海軍関係の仕事。2007年8月9日、自宅にて聞き取り。

出水補給工場は鹿児島県出水郡出水町にあり、鹿児島本線西出水駅から下車すると北側の福ノ江方面に、工員寄宿舎・工員住宅・出水分工場・出水航空基地が立ち並ぶ。県境にある袋補給工場からはそう離れておらず、袋駅から西出水駅までは約12～13キロの距離だ。鎮守府は同じだが、第21海軍航空廠、第22海軍航空廠と管轄が違うため、お互いの行き来はないように思える。ところが実際には建設に必要な材料や食材輸送のため出水―袋間を往復、出水から袋へ事務員が派遣されるなどの関係性が生じていた。

42) O：1926（大正15）年生まれ。施設部事務所勤務。2007年8月22日、自宅にて聞き取り。

43) 水俣市農林水産振興室『袋地下特殊地下壕水俣市役所土木課報告書』2007年

写真P-1
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-1」と記されている。
→ 奥の壁には「P-1」と記されている。

写真P-2
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-2」と記されている。
→ 奥の壁には「P-2」と記されている。

写真P-3
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-3」と記されている。
→ 奥の壁には「P-3」と記されている。

写真P-4
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-4」と記されている。
→ 奥の壁には「P-4」と記されている。

写真P-5
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-5」と記されている。
→ 奥の壁には「P-5」と記されている。

写真P-6
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-6」と記されている。
→ 奥の壁には「P-6」と記されている。

写真P-7
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-7」と記されている。
→ 奥の壁には「P-7」と記されている。

写真P-8
→ 地下1階の入口付近。左側の壁に「P-8」と記されている。
→ 奥の壁には「P-8」と記されている。

図3-1 地下室内部調査結果(2)

調査内容	調査日時	調査場所
地下1階内部調査結果	平成 22年 2月 日	水鏡作

(出典) 水俣市農林水産振興室「袋地下特殊地下壕水俣市役所土木課報告書」2007年

Figure 6-7 is a detailed technical drawing titled "平成18年度特殊地地下埋設工事基本設計図(プラントヤード 進入路など)". It is a topographic and engineering plan of a site. The map shows contour lines, building footprints, and proposed infrastructure. A legend in the top right corner defines symbols for underground structures, existing roads, and access points. A scale bar at the bottom left indicates distances up to 100 meters. A north arrow is located in the top right corner. Text annotations on the map provide specific details about the plant yard and access road. A table at the bottom right summarizes the project information.

実施年度	平成18年度 特殊地地下埋設工事 追加特殊地地下埋設工事
箇所名称	プラントヤード、進入路等
期 日	平成 18年12月 日
機 関	水防科

(出典) 水俣市農林水産振興室「袋地下特殊地下壕水俣市役所土木課報告書」2007年

「朝は暗か時に起きらんば。いわし網が毎朝出よった。夜明けには『いわし、アジが見えた』って、立てまわしよったで。子どものおところは、朝ごはんの準備ばしてから出ていく。漁がひと段落すると、7時半～8時くらいから軍の仕事が始まりよった。仕事は、甲斐都義さん（明治40年12月10日生まれ、四国出身：元大村第21海軍航空廠袋補給工場主任海軍少尉）ちいう人が一番上で。主に隧道堀りに土方、火薬作りたいな。お昼ご飯は、その作業をしとる場所場所に弁当持って行って食べた。夕方5時ごろ終わりよった。夜は洗濯なんかした後、11時頃に寝て、朝は3時に起きて。網元さんな、私は中村さんに行きよった。ほら貝の鳴りよったでな。貝の鳴ったら、『いわしの見えたっじゃ、行こう』ち言って、出て行きよったたい。船の一艘出れば、何艘ちおったけんな。中村さん、杉本さんち親方さんがおったからみんなで出よった。獲ったら、伝馬船に乗せて丸島に持って行きよった。獲れすぎた時にはな、畑の堆肥にしよった。いわしは腐れるもん。昔は、狭い道にずっと干してあったで、よそんとやったっち、ひょいと取って、カミカミしておった。そげんしてよかったもん、みんなで助けあって生きとったたい」⁴⁴⁾

と当時の生活の様子を語っている。茂道では、国からの徴用を受けた茂道住民も漁の仕事を続け、さらに行商をしていたことが示されている。ただし、これは網子の証言であるため、網元が1日にどのくらいの回数、網を上げていたのかは特定できない。

戦時中の配給に関しては、「米は家族、2～3人おとに、1ヶ月に5 kg。砂糖、醤油、味噌の配給も少なかった」⁴⁵⁾ という話を踏まえると、足りていなかったようである。そのため、「戦争の時は、カライモと、麦ですね。それと地域の方が売りにくる魚を買って食べていましたよ」⁴⁶⁾ というように、魚は大事な食料であった。戦時中においても毎日の漁は欠かせなかった様子が伝わってくる。

第2節 新たな移住者の生活

戦後、袋補給工場跡地は生活困窮層に対する生活の場として提供された。1946（昭和21）年10月15日に沖縄帰還命令が出されるまで、沖縄疎開学童児の一時居住場所となった⁴⁷⁾。当時、水俣市立袋小学校で教諭をしていたNは、

「戦争中は湯の鶴辺りにもいらっしゃった。ところが終戦になってから、いろんなところに転々としていらっしゃったと思います。それで、袋の方にも来たんですね。茂道に爆薬倉庫（袋補給工場を指す）があったので、沖縄の疎開児童の収容もある程度で

44) Q：1929（昭和4）年生まれ。2007（平成19）年8月9日、自宅にて聞き取り。

45) P：1928（昭和3）年生まれ。2006（平成18）年5月12日、自宅にて聞き取り。

46) N：1925（大正14）年生まれ。2007（平成19）年9月27日、自宅にて聞き取り。

47) 水俣市史編さん委員会『新水俣市史』上巻、水俣市、1991年、p936

きました。生徒そのものは爆弾倉庫にいたわけです。沖縄から疎開する時に、連れてこられた先生方が面倒を見て、勉強も勿論させられるし、ずっとついてらっしゃったんですよ。倉庫だから、寝泊まりするだけのところでしょ。夏の時分だから、もちろん布団はいらないから、ほんの寝泊まりするだけのところだったんだと思いますよ。それで、お風呂なんかは、子どもたちは水でも何でも浴びるけれども、先生方はどうにもならないから。先生方はその時、5～6人いらっしゃったかな。先生方に『お風呂に入りに来て下さい』って五右衛門風呂に入れたりしていました。その頃の食事と言えば、カライモのツルですね、それをおかずにして。あるいは、ツルを取って、皮をむいて、油炒めとか何とかすると、割と美味しい、それを食べさせられたんじゃないでしょうか、まあ、あるものはみんな分け合わないと仕方のない時じゃないですかね。かぼちゃのツルとかですね、もう、それこそよそから来ていらっしゃるわけだから、土地もないですしね。で、帰りの船を待つ間、自分たちでできることは自分たちなりにしたわけですよ」⁴⁸⁾。

と語っている。約2ヶ月間、沖縄疎開学童児は引率の先生とともに袋補給工場跡地で生活をした。その後の、袋補給工場跡地がどうなったかについては、Qが、

「朝鮮の人でん日本の人でん、戦争が終わって、水俣に残らした人もおらしたよ。奉仕隊の人たちはだいたい帰った。引揚者が事務所や工場があった場所に入ってきた。そん場所もとは田上家の土地だったから、終戦後は返してもらったけど、すぐに『出ろ』ちは言いならんしなあ。何十年ちおらしたよ。引揚者の人たちが住み着いて。水俣病の流行って、お金もろてから出らしたったい。出らした人たちは、もうほとんど死んでおらっさん」⁴⁹⁾

と語っている。戦時中、Q家の土地は国から収用された。収用された土地には、工場や倉庫・車庫が建てられた。戦後は田上家に返却されたが、戦時中の建物に奉仕隊の一部や引揚者が移住してきたため、建物はしばらくの間残したのだという。

引揚者として茂道に移住し、袋補給工場跡地で生活をしていた生駒秀夫（H）の証言を以下に記す。生駒秀夫（H）は、1943（昭和18）年7月4日、生駒家の次男として朝鮮で生まれた。まもなく終戦となり、父の故郷に帰ろうとしたが断念して、母親の故郷の水俣市に家族4人で引揚げることとなった。住む家がなかったため、水俣市立第一小学校裏にあった防空壕の中で暮らし始めた。防空壕内は、家をなくした人たちがひしめき合っていたという。母親は、防空壕内で3人目の男の子を出産した後、しばらくして亡くなった。1947（昭和22）年頃、「防空壕内は空気が悪くて、衛生上よくないから」と、水俣市職員が別の住まいを勧めてきた。こうして連れて行かれたのが、袋補給工場跡地であった。生駒家のようにして連れて

48) N：1925（大正14）年生まれ。2007（平成19）年9月27日、自宅にて聞き取り。

49) Q：1929（昭和4）年生まれ。2007（平成19）年8月28日、自宅にて聞き取り。

こられた引揚者は他にもおり、袋湾沿いの「袋補給工場跡地」と「そなた」と呼ばれる茂道内の2ヶ所に分けられた。生駒家は、袋湾沿いの「袋補給工場跡地」に住むことになった。生駒は、

「測上マサエや一二枝の4～5人、藤田キンイチ、奥さん、きんちゃん、かずこ、たかしの5人、測上才蔵や洋子の5人、木元さん夫婦にたっちゃんという同級生家族が6人、田上あきおさんと子どもが6～7人、そして自分たち家族の4人が海軍倉庫（袋補給工場を指す）に住んでいました。世帯ごとに仕切りの板があるだけで、ご飯を炊くと煙が倉庫内にモクモクなりよった。電気はなくて、ランプを使った。水道もなくて、井戸水で食器を洗い、飲み水は「たかぶき（地区の名称）」にもらいに行っていた。五右衛門風呂が外にありまして、袋湾がお風呂場がわりだった。風呂や食事の用意に使う焚き物は、茂道山に拾いに行っていた。1軒が炊き始めるとみんな連れ立って風呂に行くなど、倉庫内は1つの大家族のように助け合い生活をしていました。」⁵⁰⁾

と、1つの袋補給工場跡地に6世帯約30名が住んでいたことを語っている。戦後は、生駒家のように深刻な生活困窮といった事情を持つ層が茂道に流入してきた。

戦後の袋補給工場跡地は、「沖縄疎開学童児」の一時居住場所として使用された後に、「奉仕隊」「新たな引揚者」の生活の場として使用されたことになる。これとは別に、元大村第21海軍航空廠袋補給工場主任海軍少尉を務めた甲斐都義や奉仕隊のように、戦時中に茂道に来て、戦後も住み続けた層もあった。

第3章 自然界にあらわれた異変

第1節 海や生き物にあらわれた異変

第1節では、海や生き物、人間にあらわれた異変に関する証言を記述していく。何度も繰り返すが、茂道という地域は、海と密接につながっている場所に位置している。1960（昭和35）年の茂道の地図を見ると、茂道湾や袋湾沿いに家が密集している様子がよくわかる（図5）。

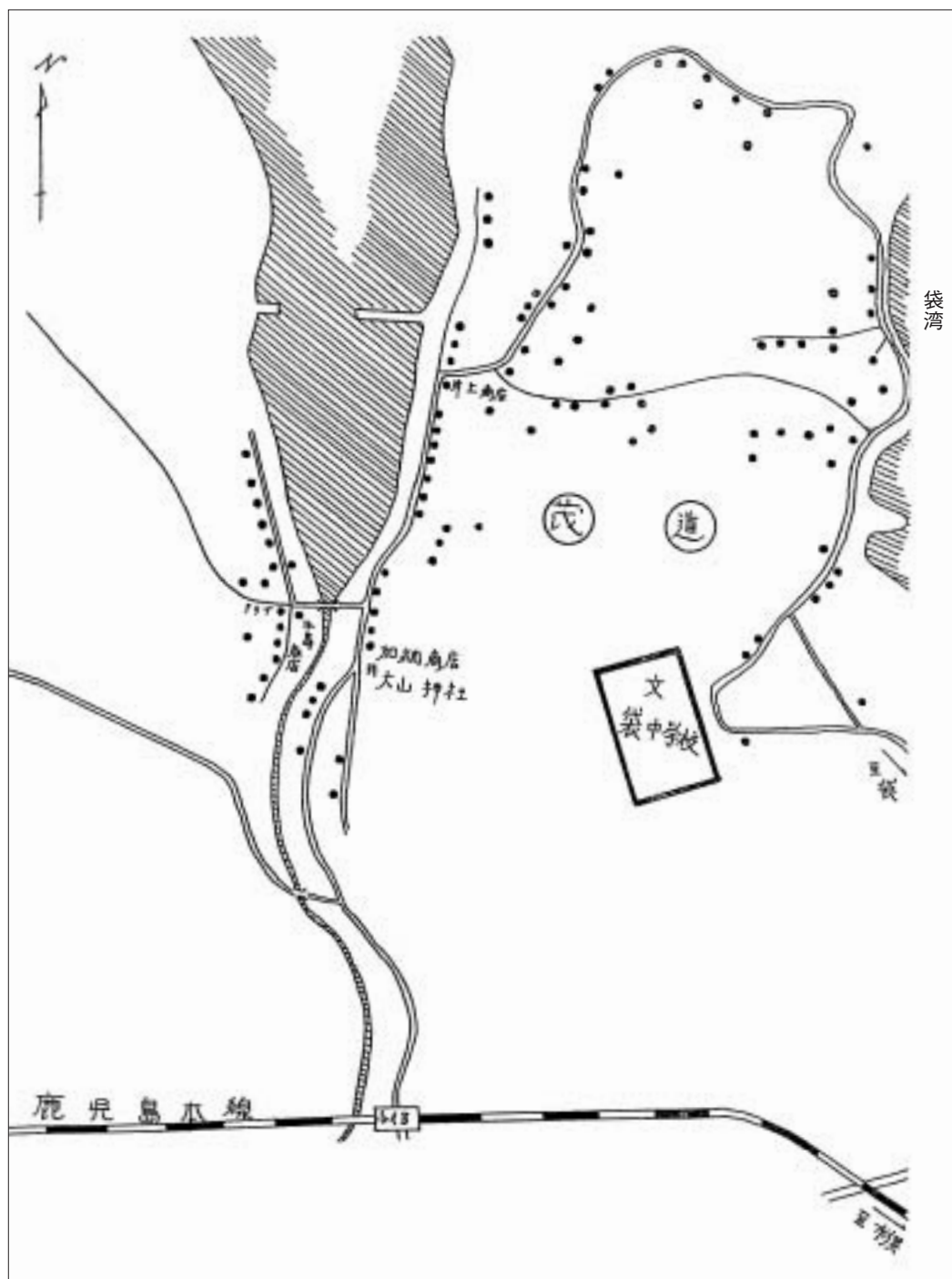
1929（昭和4）年に生まれたQは、

「チッソの毒が流れてくるまでは、足の踏み場はなかごつカキがつきよった。貝も、アサリの3倍くらいのおおきさのが、ざるいっぱい獲れよった。カラス貝が、いっぱいついて、それは、炊けば甘みのあってなあ、吸い物でも、しょうゆで味をつけて炊いても美味しかった。イワシもスズキもトコロテン草も毎日とれよった。畑ではサツマイモに麦もとれるし、茂道は住みよかったっばい」⁵¹⁾

50) H：1943（昭和18）年生まれ。2007（平成19）年1月15日、自宅にて聞き取り。

51) Q：1929（昭和4）年生まれ。2007（平成19）年8月28日、自宅にて聞き取り。

図5 昭和35年6月現在 茂道の地図



(出典) 前田重雄『水俣地図』宮崎一心堂、1960年

と語っている。このように、茂道は袋湾の干潟がもたらす海の幸に恵まれた場所だった。しかし、その海が次第に変化し、生き物や人間にも異変が起こるようになった。茂道住民に、その変化はどのように映っていたのかをみていく。

海の変化については、

「ココダイが浮いているのを数回見ました。…(中略)…27年ごろじゃなかったかと思っています。」⁵²⁾、「カラス貝にカキ、トコロテン草と、全然つかんごつなってツルンツルンになってしまった。たまにカキがおったとしても中が青くなっとった。スズキがウロ～ンウロン泳いどったり、イワシが打ち上げてきたりした。沖におらんばいけん太かカニ、ワタリガニがな、陸(おか)にあがってしもたもんなあ。だけん、み～んな、部落ん衆は『あすけ行けば、カニの上がとっと』ち言うて、みんな食器を持って獲ってきて湯がいて食べよらしたったいなあ」⁵³⁾

などの証言がある。沖にいるはずのカニが陸にあがってくる、イワシが打ち上げられてくるなど、これまで経験したことのない現象が起こるようになる。多くの人は、船での漁とは別に、「潮が引くまでは貝ばこさえて、潮が引いてからはカキを打たんばん」と、貝やカキをとってきて食していた。ところが、カキの身が青く色づくようになり、そのうち湾に育たなくなり姿を消していった。魚が汚染されているとは知らずに、「イワシのうっちゃげた、はよ食器持って来て」と近隣同士で声を掛け合い拾いに行き、湯がいて干して食べていたという。このように、普段とは違う海の様子を、幾人もの人が目撃し記憶している。

生き物の異変については

「タレソ(いわしの子)を食べとったカラスが陸(おか)にな、いい～っぱい落ちてきて死んでしもうて真っ黒になったこつもあった。写真機があったなら、そんな様子を撮っておいたのに…」⁵⁴⁾

という証言がある。茂道のタレソ(いわしの子)は有名で、近隣の湯堂の漁師がカツオの餌として買いに来ていた。新鮮な状態で売するために茂道湾に活けてあったタレソを食べた鳥やトンビ、水鳥が死んでいった⁵⁵⁾ということだ。また、

「猫なんかはクリクリひっくり返って。犬も豚も鶏も死んでしまった」⁵⁶⁾、「猫なんか

52) 水俣病訴訟弁護団『水俣病裁判資料集1 労働者・市民の証言』1972年

53) Q：1929(昭和4)年生まれ。2007(平成19)年8月28日、自宅にて聞き取り。

54) Q：1929(昭和4)年生まれ。2007(平成19)年8月28日、自宅にて聞き取り。

55) 他に、湾に打ち上げられた魚を鳥が食べていた話など諸説ある。

56) I：1949(昭和24)年生まれ。2004(平成16)年10月24日、自宅にて聞き取り。

はもうな、海に飛ばしこうたもんな。豚は、ほう、漁師あたりんすればな、魚釣りで、魚ば主に食ぶつでしょうが、で、残った魚ば野菜とかなんとかと混ぜくって豚のえさで食わすつと。そつで、豚もなったっじゃもんな、ひどかったもんな」⁵⁷⁾

というように、野生の生き物だけではなく、飼っていた生き物も死にはじめた。1954（昭和29）年の「水俣市茂道部落 猫てんかんで全滅 ねずみの激増に悲鳴」⁵⁸⁾という記事にある通り、茂道地区の猫は全滅してしまい、急増したねずみが漁具の網をかじり、漁師を苦しめた。困った漁師は、他の地域から猫をもらってくるなどしたが、「茂道や月の浦あたりじゃ、何べんくれてやっても、猫ん子が育たんげなばい、くれ甲斐もなか」⁵⁹⁾というように、茂道に引き取られた猫は育つこともなく死んだ。猫の発病に関しては、「昭和32年2月18日、熊本大学法医学教室（世良教授）が、熊本市内でとらえたネコを8匹もってきて、湯堂に2匹、茂道に4匹、水俣市内に2匹を預けた。各地区の住民の家で、普通に飼ネコとして飼ってもらっていたが、まず32日目（3月22日）に、茂道の杉本某氏宅へ預けたネコが発病、それから次々と全部のネコが発病して、最後は4月20日茂道の金子某氏宅、4月24日湯堂の井上某氏宅へ預けたネコが65日目に発症した」⁶⁰⁾という記録が残されている。これらの異変は、茂道湾がメチル水銀などの化学物質に汚染され、生息する生き物が暴露していたことを裏付けている。

第2節 人間にあらわれた異変

人間にあらわれた異変について杉本栄子（R）は、「子を産む女たちの異変は、孕んだ生命が月半ばで流れてしまう。生れてくる赤ん坊にも異常が起こり、年寄りが原因不明の苦しみにて床に伏してやがて死んでいくのです」⁶¹⁾と記している。栄子自身も、「たてつづけに三人流産」⁶²⁾しており、茂道に住む妊婦に異変が生じていた。流産・死産の多発に加えて、産まれた赤ちゃんにも異変が現れるようになった。胎児性水俣病患者を子に持つOは、

「昭和31年ですか、あん時に発生したんですけん。私はその頃、三番目を生んで。こ

57) B：1925（大正14）年生まれ。2006（平成18）年5月2日、自宅にて聞き取り。

58) 「熊本日新聞」1954年8月1日

21日水俣市茂道漁業石本寅重さん（37）は市衛生課を訪れ、ねずみが急増して漁村を荒らし回り、手がつけられないと駆除方を申し込んだ。

同部落は120戸の漁村だが、不思議なことに6月初めごろから急に猫が狂い死し始め（部落ではねこテンカンといっている）100余匹いた猫がほとんど全滅してしまい、反対にねずみが急増。大威張りで部落中を荒らし回り、被害はますます増大する一方、あわてた人々は各方面から猫を買ってきたが、これまた気が狂ったようにキリキリ舞って死んでしまうというので遂に市に泣きついてきたものと判った。

なお同地区は水田はなく農業の関係なども見られず、不思議がるやら気味悪がるやら衛生課でもねずみ退治にのり出すことになった。

59) 石牟礼道子『苦海浄土－わが水俣病－』講談社、1970年、p71

60) 原田正純『水俣病』岩波新書、1972年、pp.34～35

61) 杉本栄子「杉本家の水俣病について」『水俣病問題の概要』衆議院調査局環境調査室、2006年、pp.79～80

62) 栗原彬編『証言 水俣病』岩波書店、2000年、p134

こ辺りの人はみんな城山産婆さんに取り上げてもらったんですけど、私もそうで、三か月くらいしてから『滝下さん、あたんところのお子さんは大丈夫ですか。よく観察したらんば、分からないよ』ち言われて。首すわらんかったですもん。そすと、波止場の近くのお店屋さんにもそうした子どもがでけたち、その隣にも。そん子はな、生まれてから一週間じゃったもん。そうしているうちに、湯堂にも『首がすわらんし、目もおかしいし、どうもおかしか』ち子どもが出てきた」⁶³⁾

と、茂道で生まれた赤ん坊の様子を語ってくれた。首のすわらない赤ちゃんが近所のあちこちにいた。なかには産まれて1年も経たないうちに死んでしまう赤ん坊もあったという。袋に住む城山産婆さんが茂道まで来て、「よく観察したらんば」と声を掛けてまわっていたことから異常な事態であったことが浮かび上がってくる。高齢者にも影響がみられ、「じいさん、ばあさんが寝込んでも、医者には連れて行きよらんやったもんなあ。家の中でひっそりと苦しんで。そのうち、亡くなりよった」と幾人かの古老が証言している。

1959(昭和34)年、熊本大学医学部公衆衛生学教室は、原因不明の中枢神経系疾患をもつ乳児の多発について、「水俣湾内の周辺地域において、昭和30年以降に出生した乳児の中に、脳性小児麻痺様の病状を示す異常児が比較的多数居る。2ヶ年たらずの間に、月の浦、湯堂茂道の3地区の人口1724名(昭和31年調べ)における脳性小児麻痺様患児の出生頻度は約10%以上であると見做して差支えない」と、水俣湾周辺地域の脳性麻痺様小児の出現頻度が大きいことを示している。この原因については、「中毒性原因物質が胎盤血行を介しあるいは母乳を介して移行し、類似の病状を呈せしむるにいたつたとの可能性も考えられる」としながらも、断定はできないとした⁶⁴⁾。のちの研究で板井八重子医師は、茂道と赤崎を対象地区として調査を実施し、「昭和30年代の後半から40年代の前半にかけての異常流産・死産が異常に高い。有機水銀による影響で流産・死産がふえていると考えられます」⁶⁵⁾と、水俣湾周辺地域での流産・死産は有機水銀の影響であったことを結論としている。

このように、生理的に弱い胎児や病人、高齢者、そして魚貝類を多食する人々に対する影響が顕在化していた。住民も「どうもおかしか」と認識していた。医者に行くこともなく亡くなる高齢者は珍しくなかったという。医者に行けたとしても、何の病気なのか不明とされ、「アセチレン中毒による多発神経炎」、「小脳性失調症」、「脳性小児マヒ」など別の診断名がつけられていた。原田正純医師が、「水俣地区で小脳失調症、アルコール中毒、脳梅毒、脳出血などの病気で死亡した人のなかに、どれくらい水俣病患者がいたのか、今は確認すべき手もない」⁶⁶⁾、と記すように、水俣病患者の確実な人数や状況などは分らない。こうした人間に対する異変が、昭和20年代後半から昭和30年代前半にかけて顕在化してくるようになった。

63) O：1926(大正15)年生まれ。2007(平成19)年8月8日、自宅にて聞き取り。

64) 熊本大学医学部公衆衛生学教室(主任 喜田村正次教授)「水俣病に関する疫学調査成績補遺」その2、『熊本県水俣地方に発生したいわゆる水俣病に関する研究』第3報、第33巻 補冊第3 1959年3月号、pp.1～3

65) 熊本県民主医療機関連合『水俣病関係資料集』1998年、pp.683～6867

66) 原田正純『水俣病』岩波新書、1972年、p8

第3節 異変に対する茂道住民の認識

第3節では、第1節と第2節で示した海や生き物、そして人間にあらわれた異変に対して、茂道住民はどう認識し解釈していたのかについて、以下に考察する。

魚介類の異変に対して、漁師がどのような解釈をしていたのかについて次に示す。父親と漁に出ていたDは、

「魚が死にはじめたのは、1952（昭和27）年ごろから。親父と2人で、ナマコとりに行った時に、タコや小さい魚が死んどったわけですよ。親父に、『これはおかしい、こんなに魚が死ぬわけがない』と言うと、『赤潮じゃ』ち答えるわけですよ。親父も長年漁師ばしてきて、赤潮じゃないちいうことは分かっているんだけど、『魚が売れなくなる』ちゅうこつで、赤潮ち言いよった」⁶⁷⁾

という会話を親子で交わしたと語っている。赤潮ではないと知りながらも赤潮が原因と答えた父親が最も気にしていたのは、魚が売れなくなることであった。魚が売れなくなるということは、現金収入が入らなくなるということであり、自分たちの生活が危ぶまれることを意味する。したがって、生活を守る為に出てきた言葉であろうと考えられる。同じく漁師のBは、

「魚が浮き始めた時はな、『会社のじゃなかつろか』ち言いよった。ただ、会社の、ちは言いならんたいなあ。ちゃんと検査して、会社の何から、ちいうとが分からんばな」⁶⁸⁾

と、当時のことを悔しそうに語った。赤潮ではないとなると、「会社からの廃液」しか考えられないと認識していた。ところが、検査をしてチッソの廃液の何が原因なのかが分らなければ、会社が原因だとは言えないという。このロジックは、チッソや行政が繰り返し言ってきたことである。魚が浮き始めた原因は会社にしかないと確信していながらも糾弾できなかった背景には、森のなかにチッソや行政のロジックが浸透していたことがあるのではないだろうか。

次に、異変を生じた魚介類をどのように取り扱ったのかをみていく。水俣病発生初期、6～7歳の子どもだったIは、

「水俣病が発生した時、茂道の魚が酔っ払ったようにして。で、父が『これはおかしか、魚がいっぱい浮いとる』ち。で、今度はそれを食べた猫がものすごい泡を吹いて死に

67) D：1933（昭和8）年生まれ。2004（平成16）年11月11日、自宅にて聞き取り。

68) B：1925（大正14）年生まれ。2006（平成18）年5月2日、自宅にて聞き取り。

よったですもんね。それを見て父が、『魚はあんまり食わんがよか。俺が保健所に持っていくけんが』ち。保健所に持っていっても原因不明。奇病ちなって。で、『大人は魚を食べても、子どもにはあんまり食わせてはならん』ち、父は止めたっですよ。生活のきつい時には食べましたが…」⁶⁹⁾

と語っている。魚を食べた猫が死んでいく様子を見た父・寅重は、子どもたちに魚を食べさせることを自粛した。1957（昭和32）年、水俣市漁協は自主的操業禁止をしていた時期であり、水俣市漁協組合員の寅重は魚の危険性を知っていた可能性がある。しかし、漁業不振や魚が売れない状況下において魚を食べずに生きていくことは難しく、全く食べないというわけにはいかなかった。そのため、仕方なく食べる際には、できるだけ安全そうなものを選んでいたのである。「安全そうな魚」といっても、味やおいで安全か否かを判断することはできないため、まさに素人判断であった。

一方、K家では

「会社の給料だけでは生活ができないので、じさんのとって来る魚やおじのとって来る魚を家族で毎日食べよった」⁷⁰⁾

というように、魚介類に対して何か対策をとった様子はない。そもそも、「魚が危険」であることを知らなかったのである。このように、「水俣湾の魚をとってはいけない」という行政の規制がなかったため、住民は各々が判断しなければならない状況にあった。そのため、厳しい生活を強いられている家庭や、情報過疎の家庭ほど、大量の魚介類を食べ続けることとなったのである。

以上の証言を踏まえると、海の異変に対して茂道住民がどのように認識し、行動していたかが浮かび上がってくる。第1に、魚が売れなくなることを危惧し、生活を守る為に赤潮に原因を求めたこと。第2に、会社の廃水が原因だと認識しながらも、確固たる証拠がないため原因を会社に求めることができなかったこと。第3に、異変が生じた魚介類を子どもには食べさせないようにしていたが、食べるものがないため食べざるを得なかったこと。第4に、仕方なく食べる際には、素人判断でできるだけ安全な状態の魚介類を選んでいたのである。茂道住民の多くが魚介類を食べ続けていた背景には、水俣市衛生課の自粛を求める啓発はあったものの⁷¹⁾、単発で消極的なものだったため実際はほとんどの人が知らなかったことがあげられる。また、行政による漁獲禁止といった本格的な規制が実施されなかったことも大きな原因であると考えられる。加えて、漁業不振で現金収入が減少し厳しい生活に追い込ま

69) I：1949（昭和24）年生まれ。2004（平成16）年10月24日、自宅にて聞き取り。

70) K：1954（昭和29）年生まれ。2008（平成20）年、自宅にて聞き取り。

71) 「水俣市報」第49号、1959年2月1日

水俣市衛生課は、「水俣病の専用病棟がたちます」というタイトルの記事の最後に、「恋路島湾内での操業自粛を強く要望し市民各位のご協力を切にお願いいたします」という一文を載せている。

れた上に生活保障がない状況下では、魚介類を食べざるをえないといった地域特有の事情があった。

結論

1. 茂道地域の歴史的形成過程

- ・茂道は漁業に適した地理的条件を持っていた。
- ・江戸期の袋村ではじまった地曳網の網代を、明治初期に茂道の網元が買い受けた。
- ・網元と網子の間には、家族的近親性を含んだ契約関係があった。
- ・「農業を営むことが困難」、「外部との交通が不便」な条件のもとでは、食生活は魚介類に、依存せざるをえなかった。

2. 第二次世界大戦期の茂道地域の変容

- ・戦中、海軍の第21海軍航空廠袋補給工場が建設された。
- ・戦中、茂道住民の一部は、軍の仕事の傍ら漁業を続けた。
- ・戦後、奉仕隊などの戦中労働者の一部が茂道に住むようになった。
- ・戦後、引揚者などが袋補給工場跡地に移転した。

3. 水俣病事件による茂道地域の変容

- ・自然界に異変があらわれた。
- ・魚介類を多食した生理的弱者や漁民から身体被害が始まった。
- ・漁業で生計を立てていた茂道住民の生活破壊。
- ・魚の汚染を知らされなかった茂道住民は、魚介類を食べ続けた。

本論文では、茂道地域の歴史的形成過程と茂道住民の生活史、茂道住民が水俣病発生初期、どのような認識をしていたかを導き出した。

水俣病発生初期までの地域変容として、「明治以降の漁村形成」「戦中・戦後の新たな移住者」「海の汚染による魚場の破壊」などが見出された。明治以降、袋村ではじまった地曳網の網代を、明治初期に茂道の網元が買い受け本格的な漁村が形成されていった。網元と網子の間には、家族的近親性を含んだ契約関係があり、食生活は魚介類に依存していた。第二次世界大戦中の茂道には、海軍の第21海軍航空廠袋補給工場や地下壕が建設された。戦中も茂道では漁業を続けていた。戦後は、元海軍少尉や奉仕隊、引揚者が袋補給工場跡地に移り住んだ。海の汚染による茂道住民の生活破壊は、魚介類が死滅していく状況のなかではじまった。汚染は、茂道住民の身体被害に加えて、職を剥奪されたことによる現金収入の減少をもたらした。魚介類の危険性を知らされなかった茂道住民の多くは、水俣病発生後も魚介類を食べ続けた。

以上のような歴史的背景を持つ茂道住民は水俣病発生をどのように認識したのだろうか。第1に、魚が売れなくなることを危惧し生活を守る為に赤潮に原因を求めたこと。第2に、

会社の廃水が原因だと認識しながらも、確固たる証拠がないため原因を会社に求めることができなかったこと。第3に、異変が生じた魚介類を子どもには食べさせないようにしていたが、食べるものがないため食べざるを得なかったこと。第4に、仕方なく食べる際には、素人判断でできるだけ安全な状態の魚介類を選んでいたことなどがあげられる。

ここでは、茂道地域特有の条件や住民の認識を考慮した。今後は、これらを踏まえ、水俣病差別の背景にある社会的意味や差別の本質的な問題について検討していく予定である。

本論文は、平成19～20年度日本学術振興会特別研究員及び科学研究費補助金をいただき執筆することができた。

参考文献

- 有馬澄雄編『水俣病－20年の研究と今日の課題』青林舎、1979年
 石牟礼道子『苦海浄土－わが水俣病－』講談社（AJBC版）、1970年
 色川大吉編『水俣の啓示 不知火海総合調査報告』上巻、筑摩書房、1983年
 岡本達明編『近代民衆の記録 7－漁民』新人物往来社、1978年
 上米良利晴『熊本県神社誌』青潮社、1981年
 木原邦雄「茂道松の亀紋に就て」『日本林學會誌』第17巻第1号、日本森林学会、1935年
 「熊本医学会誌」第三一卷補冊第一
 熊本県葦北郡水産会編『熊本縣葦北郡水産基本調査』1922年（推定）
 熊本県総務部地方課編『熊本県市町村合併史』熊本県総務部地方課、1969年
 熊本県民医連記録編集委員会『水俣病関係資料集』熊本県民主医療機関連合会、1998年
 熊本大学医学部『熊本県水俣地方に発生したいわゆる水俣病に関する研究』第3報第33巻補冊第3、1959年3月号
 「熊本日日新聞」1954年8月1日
 栗原彬編『証言 水俣病』岩波新書、2000年
 後藤是山編纂『肥後国誌』下巻、九州日日新聞社印刷部、1917年
 下中邦彦編『日本歴史地名大系第44巻 熊本県の地名』平凡社、1985年
 城後尚年ほか『農村史料叢書五 芦北郡人畜改帳三』農村史料刊行会、1971年
 「新・熊本の歴史」編集委員会『新・熊本の歴史5 近世』下巻、熊本日日新聞社、1980年
 杉本栄子「杉本家の水俣病について」『水俣病問題の概要』衆議院調査局環境調査室、2006年
 創立記念誌編集委員会『創立記念誌－袋小学校100周年・袋中学校25周年－』創立記念事業実行委員会、1973年
 第21海軍航空廠袋補給工場海軍「第二十一海軍航空廠引渡目録1／2 第二復員局」防衛研究所図書館所蔵
 内務省地理局編纂物刊行会『明治前期全国村名小字調査書』第6巻、ゆまに書房、1986年
 農林省統計調査部『第二次漁業センサス（海面漁業第二報）』農林統計協会、1956年
 原田正純『水俣病』岩波新書、1972年
 原田正純『水俣病にまなぶ旅』日本評論社、1985年
 前田重雄『水俣地図』宮崎一心堂、1960年
 水俣市史編さん委員会『新水俣市史』上巻、水俣市、1991年
 水俣市史編さん委員会『新水俣市史 民俗・人物編』水俣市、1995年
 水俣市農林水産振興室「袋地下特殊地下壕水俣市役所土木課報告書」2007年
 「水俣市報」第49号、1959年2月1日

水俣病研究会編『水俣病事件資料集』上巻、葦書房、1996年

水俣病研究会編『水俣病にたいする企業の責任ーチッソの不法行為』復刻版、熊本学園大学水俣学研究センター、2007年

水俣病訴訟弁護団『水俣病裁判資料集1 労働者・市民の証言』1972年

山田善二郎『百年昔の家計簿』私家版、2003年